

## 四変部会から

# 第四胃変位の整復手術について

皆さん、「メタボ」で悩んでいませんか？メタボリックシンドローム、略してメタボ。最近よく聞く言葉です。一昔前は単に成人病と呼ばれていましたが、それに取って代わって「メタボ」がすっかり市民権を得たようです。響きはかわいいのですが、メタボが進行すると「死の四重奏」などと呼ばれる状態になり、かわいさとは裏腹に実は恐ろしい「病気」なのです。さて、今回も乳牛のメタボともいえる第四胃変位、略して四変についてのお話です。

前回(1月号)ではどうして四変が発生するのかを簡単にお書きしました。四変を一言で言ってしまうと「四胃内にガスが溜まった状態」となりますが、その根底に低カルシウム血症があったり、代謝疾患(ケトージス)があったりと、まさに三重奏四重奏状態なのです。四変を予防することは可能ですが(簡単ではありませんが・・・)、いざ四変になってしまったら最終的には手術によって整復するよりありません。ところで、「左の四変だね」と獣医さんが言っていたのに、いざ手術から帰った牛を見たら右側に傷がある、ということに疑問を感じた事はありませんか？今回は普段なかなか見る事の無い「四変の手術について」です。

四変の整復法は様々ありますが、現在釧路地区 NOSAI ではほとんど「立位右けん部切開法」で行っています。これはその名のとおり立位=牛を立たせたままの状態、右のけん部(脇腹のへこんだ部分)を切開して、四胃を元の位置に戻して縫いつける手技です。ここでは左の四変を例にしてその大まかな流れをご説明します。

まず牛を柵場に入れて麻酔をします。起立状態のまま手術を行うので、全身麻酔ではなく局所麻酔を使います。麻酔が効いた頃を見計らって右のけん部を消毒して皮膚を切開します(写真1)。変位した胃は左にあるのになぜ右を切るのかと言いますと、牛の左腹には大きな一胃が存在するため、ガスを抜くことが出来ても、四胃を縫いつけることが難しいからです。筋肉の層と腹膜を切開すればいよいよ内臓に到達します。この切開創から腕をぐいっと肩まで入れて、写真2の左にある大きな針のついたチューブで四胃のガスを抜きます(写真3)。ガスを抜くことで牛の左側にあった四胃を右側にたぐり寄せることが可能になります。そして、切開部の近くにきた四胃から胃の出口にあたる幽門を探しだし、切開部付近に縫いつけます(写真4)。本来、四胃は一胃の下、お腹の真下にあるものですが、右脇腹に引き上げて縫いつけることでガスが溜まるのを防ぎ、四変の再発を防止するのです。しかし、この縫いつけも恒久的

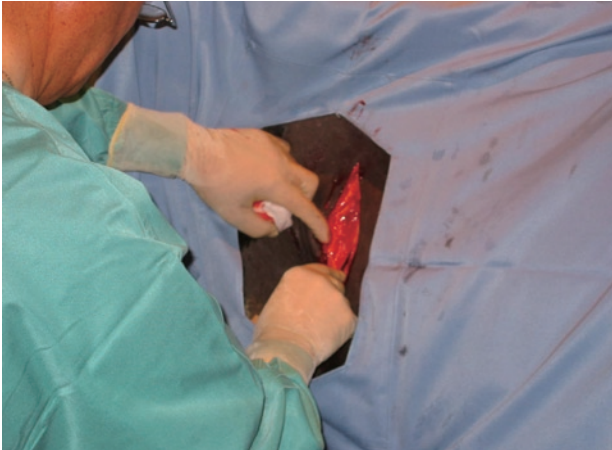


写真 1

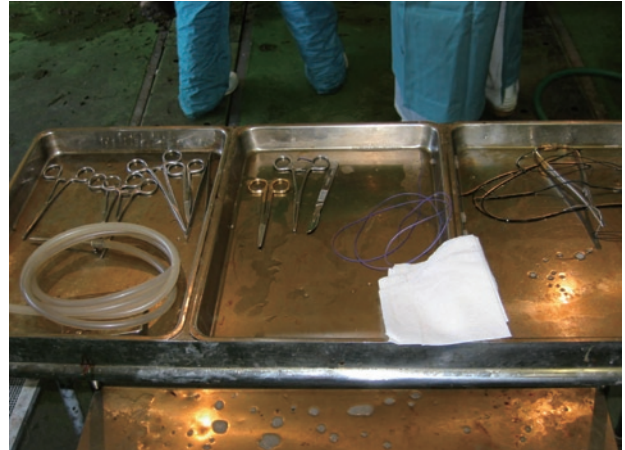


写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

なものではなく、何年か後に四変を再発することもあります。最後に切開部位の縫合をして終了になります（写真 5）。適切な麻酔を行うことで牛の苦痛はほとんどなく、単純な四変（脂肪肝などの合併症が無い場合）であれば術後の食欲回復は早いようです。

（音別白糠支所家畜診療課 鮎川 悠）